慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	計画化と統制 （国土計画の政治的性格）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.10 (1940. 10) ,p.1491(153)- 1521(183)
JaLC DOI	10.14991/001.19401001-0153
Abstract	
Notes	皇紀二千六百年慶應義塾大學部設立五十年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19401001-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

計畫化と統制

——（國土計畫の政治的性格）——

奥井復太郎

（一）

慶應出版社發行の「現代經濟新書」中に「國土計畫論」なる一篇を執筆するに當つて國土計畫（或ひは更に廣く見て計畫化）の現代的性格として次の二點を指摘しておいた。其の一つは政治的性格で、も一つは經濟的性格である。勿論、今日の如く政治と經濟とが非常に接近した現狀にあつては、國土計畫の兩性格は、當然元來が一體不分離のものであつて之れを政治と經濟の兩者に分ける事が無理であるかも知れない。或ひは國土計畫そのものが此の不可分性の表現と云つて差支ないかも知れぬ。併しそれにも拘らず、吾々は一應、此の兩面を分けて見る必要がある。そして私は經濟的性格としては開放經濟から封鎖經濟への移行或ひは粗放經濟から集約經濟への推移が認められ、政治的性格としては自由主義から統制主義への經過を認める事が出來るとした。（「國土計畫論」第一章第二節第三章第四節）第一の面である、經濟的性格が開放經濟から封鎖經濟への移行に示されてゐると云ふ點に就いては本稿

で詳しく論ずる豫定ではない。しかし事實は此の集約經濟性の問題が明瞭にならぬと、政治的性格に示された統制主義への過程が充分理解しにくゝなると思はれる。其の意味で簡單に說明を加へておかうと思ふ。

經濟集約性の現象は米國經濟上の用語を採つて表現すれば所謂邊疆經濟の消失と云ふ事である。Frontier Economy と云ふ事は既住地の內面的經營を强化しないで未開地への外延的發展に主力を注ぐ方法である。米國經濟に於いては之れが西進運動となつて現はれた。併し限りある國土は結局終點に達せねばならぬ。其處で極界まで行きつゝて了つた人々は今更乍らに己らの經過して來た過去の道程をふり返つて見る事になつた。或ひは一米國評論家が述べてゐる樣にカリフォルニア州境に見張人をつけて移民入國者の防止に當らせたと云ふ事は、アメリカ經濟が過去の體制から新しきものに移行せねばならぬ事を示す一つの表徵でもあつた。從つて今迄の自由奔放な土地利用に無統制な自由主義の足跡を認め得るとするならば、爾後の方法は必然、何等かの形式で統制的のものたらざるを得なくなつて來る。故に先づ最初に色々の形式で資源保存、土地保留（Reservation）が問題となつて來てゐる。國立公園の如き、今日の情勢から考へると頗る迂遠な項目であるかも知れないが、人力で造出する事の出來ない價値を何等かの方法で保存するに非ざれば自由開發の爲めどうなつて了ふか分らぬと云ふ危惧に發したものとしては、明らかに國土計畫への道程に載つてゐると云ふ事が出來る。『其の時迄は、西歐諸國は特に社會・經濟的調整の問題に係はる事がなかつた。何故かと云へば主に市場獲得、從つてそれに基く經濟的帝國主義の發展は國民的關心への捌口を提供し、それ自體が社會問題に對する自働的解決と喧傳されたからである。しかし物理的な邊疆の後退と共に生活の新信條及び基準を構成するの問題に決然と直面しなければならなくなつた。』（Planned Society. F. Mackenzie. p. xii）

此の邊疆經濟の消失が唯單に過去の道程をふり返へると云ふ事に止まらず、其れは同時に米國經濟の體制に著しい變化を與へてゐるのである。つまり大資本の偉力が增大して來たのである。否、大資本の投下に際して其の集約性が非常に强化して來たのである。從つて常に愼重なる計畫化が必要になつて來て、國土計畫と云ふ手法が採上げられる以前に於いて大資本の經營は非常に計畫化してゐたと云ふ狀態にあつた。B. H. Kizer が米國產業の驚異的發達の原因を調査・研究・實驗・計畫に置いてゐるのも其の適例である。彼は次の樣に米國產業界の一有力者の談話を紹介してゐる。

「恐らく皆樣の多くが、吾が會社で調査研究所に多額の經費が投ぜられてゐる事を御存知と思ふが　吾々が最近此の調査機關方法の重大な擴張をやつた事に就いては未だ御承知なからうと思ふ。從來、重役會の各人が管理上の凡べての問題に意見を述べる事を豫想されてゐるが、其れが極めて限られた知識しか持ち合はせなかつたり、或ひは高々仲間の重役か又は高級幹部の一人が提言する事の出來る程度の註解を附するの程度であつた。併し吾々の仕事は益々廣汎複雜になつて來て永年に亘つて吾々の知識が不充分だと云ふ事を痛感してゐた。政策上重大な過誤を行つた事も屢々あつたが、それが決定の時に何も充分知らなかつたと云ふつまらぬ理由に基いてゐた。

「先頃、調査研究機關の仕事に關する問題を論じてゐた時に、仲間の一人が、調査所の報告書によつて凡べての事

實が利用出來るので此の問題の解決は頗る容易だと云つた。他の仲間も云つた。『私は以前から、此の調査所方法を、吾々の惱んでゐる管理上の問題の多くに利用すべきであると考へてゐたのだが。實際どの部でも之れによつて利する事があるのに吾々はたつた一部でしか此の調査所方法を利用してゐなかつたと云ふ感がする。』

「之れを基にした討議の後で吾々にとつて重要な決議が生れた。即ち即座に、重役會で決議すべき事項にして、若し吾々が之れに對して事前の調査をやらせておく事が出來たなら、もう一層賢明な決定に到達し得る事が頗る多いと云ふ事に意見の一致を見た。そこで今日では製造部門で研究所を持つてゐる樣に社長及び重役會の爲めに直接仕事をする調査研究機關を持つ事になつたのです。執務上の問題が重役間に廻つて來る以前に、充分愼重に重役會の調査所で研究される、彼等は問題に重要な關係を持つてゐると思ふ事實を全部、公平且つ賢明に蒐集し、彼等の氣のついた點を添附して報告書を作成する。

「之れらの研究が如何に吾々の仕事を簡單にし、吾々の決定から推量や疑問の域を除いたか、私にとつて頗る驚くものがある。今迄は決定の延びるのが普通であつたが、今日では早急に決定し得るし、今までは白熱した論爭を交へるのが通例であつたが、今日では是等の事實が決定を支配するので、さう云つたものは大部分無くなつて了つた。

「此の新しい調査技術は、會社經營にとつて私の幾分とも知つてゐる最も價値の大なる施設である。私の申した事を記憶に止めておいて戴きたい。恐らく一世代中に、アメリカの成功せる事業はいづれも之れを採用するに到るであらうと。私の判斷では之れが現代の事業經營方法を革命化する運命を擔ふてゐると思へる。」（American Planning and Civic Annual, 1938）

此の事は吾國事業界に於いても決して目新しい事でないかも知れない。しかし之れが一九三八年のアメリカのプランニング協議會の席上で報告されてゐる所を見ると、プランニングの必要を强調する趣旨の下にではあるが、產業經營が如何に行はる可きかの方面を示すものとして新しい傾向と云ふ事が出來るであらう。

殊に大資本集中、獨占資本の段階に於いて此の計畫化は最も愼重に考慮されねばならぬ所であらう。此の事は色々の事實に對合する點であるが、例へば大資本の投下が既に指摘した樣に一擧手一投足に輕々しくあつてはならぬと云ふ理由（前揭「國土計畫論」第一章第二節）は計畫化への當然の推移の一例であり、計畫化は一定の規模を前提とする事は同じく計畫化と大資本（大規模）との關係を示す他の事例である。大資本が計畫化を要請する事の必要は今更說くまでもない。第二の事例である、計畫化が最も效果的たるには相當大規模である事を要すると云ふ命題は次の樣に解釋する事が出來る。ソ聯五箇年計畫に就いて年度計畫と長期計畫との性格的相違が次の樣に示されてゐる。即ち「年度計畫は大抵我々の合計畫的干涉に服さない客觀的事情に制約されてゐるものである。前年度の資本投下及び最近の收穫が前以つて殆ど一〇〇％まで生產、商品流通、輸出入、豫算、信用等々の領域に於ける次年度の經濟を決定する。一ケ年內での現存生產能力のより有效な組合せを目的としての之れが新組織の可能性は極度に限定される。其の可能性は五ケ年間の期間ならば既にもう遙かに大であるが、十ケ年乃至十五ケ年の期間があれば——著しい蓄積の存する場合には——實に莫大なものでさへある。だから天才的組織者にとり自由なる創造的構想力を

展開すべき機會は特に綜合的計畫（ゲネラルプラン）に於いて大であり、五ケ年計畫に於いてはより尠く年度計畫に於いては零に等しい。そして凡べての計畫が客觀的に不可避なるものについての豫測と我々の主觀的階級的利益の立場よりする合目的なるものゝ計畫立案との諸要點からなる一結合たるものであるとすれば、年度計畫に於いては豫測が、多年間の計畫に於いては豫定（Vorbestimmung）が先に立つ。』

即ち此の引用文で窺知出來る樣に効果的な計畫は、常に或るダイメンション（面積）を持つてゐる事を必要とする。土地面積に就いて見れば都市計畫の必然的發展が地方計畫となつたのは、一都市の面積では有効なる計畫が行はれないからであつた。國土計畫へと更に發展すれば面積上の前提としては申分なく、且つその國土計畫が近衛内閣で決定された樣に東亞共榮圏の國土計畫と云ふ樣に日滿支に及ぶ廣大なるダイメンションを持つ樣になれば（他の事情を假りに一應除外して考ふる事が許されるならば）なほ効果的たる事を保證し得るのである。

之れと同樣に資本の場合に於いても零細なる個別資本は、假令計畫化するも其の有効性が必ずしも大とはならぬが集中された大資本又は一定の統制下に置かれた資本となれば其のダイメンションが增大するが故に充分効果的たり得るのである。前述の引用は、之れを計畫期間に就いての觀察であるが自由なる創造的構想を展開し得可き天才的組織者が活躍し得る天地は恐らく大資本の世界であらう。土地的に見て國土計畫が一局地を全國的編成の枠内に嵌入するであらう樣に、國土的意味の資本は、大資本が群小資本を其の翼下に收めて、之れを局部的に配置して全國的資本體制の中に嵌入する作用を意味するであらう。

（二）

國土計畫の經濟的性格は以上の如く大經營と集約化との結合に之れを見出す事が出來るが、其の政治的性格はどうであらうか。玆に吾々は二つの異つた主張を見出すのである。其の一つは國土計畫、或ひは一般にプランニングが全體主義國の體制であると云ふ主張で、他の一つは民主々義體制に於いても當然起り得るものであり、唯、其の間に若干の相違の存する事を認めるものである。全體主義國の體制と云へば當然、ソ聯・獨逸・伊太利の三國を含み、民主々義國の體制としては主として英米を指してゐる。何故にプランニングの性格について其の政治上の性格が斯くも問題になつたかと云へば、其の答は一つである。即ち如何なる國と雖もプランニングの必要を痛感し、深淺厚薄の差はあつてもいづれも之れを實行してゐるからである。一九三七年國際住宅及都市計畫會議で英國の都市計畫家アンウィンが報告總括の結論として申述べてゐる樣に、計畫の進展が各國一樣に行はれてゐる事、國情の相違に拘らず凡べての國が計畫の必要に迫られてゐるのである。（内務省計畫局「國土計畫及び地方計畫」）英國は永く自由主義の國であり强力に國土計畫的な傾向に反對して地方計畫に力點を置いて來たが最近には國土計畫への發展の必要が痛感せられたと認められてゐる。

故に事實は、プランニングの問題を中心として、兩體制の國々が互に自己をたてゝ相手方を誹謗してゐると云ふ貌を示してゐる狀態である。獨逸空軍のロンドン爆擊が開始するに先立ち、北歐戰線及び白和フランダアス戰線に於ける英佛軍の壞滅に連れて、自由主義傳統の英國が一擧に自由主義を放擲して强力な戰時統制政策に出た事は我

國にも大袈裟に報導された。事實英國に於いても第二次大戰の勃發と共に次の樣な見解が行はれてゐた。即ち『此の戰爭は英國民の生活に新しい且重大な一章、つまりプランニングが首要な命題となつて來る一章の開始を前觸れするものと思はれ得たであらう。一九三九年九月二日は自由競爭的混亂的資本制個人主義と社會的必要への考慮を第二義とする計畫經濟との大分水嶺と認められると云ふ印象の下に働いてゐる不注意な人々が幾らかはゐる。』併し玆で此の論者はかゝる見解が不當である理由及び其の證明として三十年前卽ち一九〇九年に承認せられて以來の都市計畫法の統制的な措置を指摘するのである。『爾來三十年に亙り、此の問題に關する長い連續の法案が法令書に現はれる事になり、地域的計畫の範圍は之れによつて都市から田舍に、都市の未發達周邊から中央市街地部へと擴張されて來た。常に增大的な權力の流れがあらゆる種類の地方政府の頭に降り注いだのである。』（William Robson: Evacuation, Town-Planning and the War. The Political Quarterly. Jan-March. 1940.「三田評論」十月號「空襲下ロンドンの教訓」及び同じく十一月號英國工業人口分散に關する拙稿參照）

此の論者がかゝる言を爲す所以は、自由主義の傳統國たる英國に於いて既に統制的計畫化が早くから行はれてゐると云ふ事を指摘したい爲めである。從つてプランニングはソ聯及び獨逸に於いて最も體系化し且つ成功的に實施されてゐるとは云へ、他の所謂民主々義國も決して此の問題に觸れてゐない譯ではなく、逆に云へば、彼等も計畫化の必然を承認するが故に、殊更に「計畫と自由」とを云ひ立てゝ全體主義的、殊に獨裁的體制への追從でない事を力說せんとするのである。

故に此の問題は「自由と計畫化」「獨裁と計畫化」「民主々義と計畫化」と云ふ表題の下に此の問題は非常に活潑な論戰を惹起したのである。此の論戰に於いて計畫家や所謂ブレインと稱せられる一派の人々が計畫化の合理性を主張したのは當然である。W・ヘーゲマンは米國に於ける計畫化が全く立憲的である事を主張するに汲々としてゐる。（W. Hegemann: City Planning, Housing）其の最大の傑作は彼が前のルーズヴェルト大統領の演說を引用してゐる箇所である。同大統領は一九〇八年五月十三日、自然資源保存全國協議會の開會に際して次の樣な演說を行つた。

"It was in Philadelphia, 1787, that the representatives of all the States met for what was in its original conception merely a waterways conference; but when they had closed their deliberations the outcome was the Constitution which made the States into a nation. The Constitution of the United States thus grew in large part out of neccessity for united action in the wise use of one of our natura resources. The wise use of all of our *natural resources* which are *national resources* as well, is the great material question of today (Hegemann. Vol. I. p. 42)

斯くの如くヘーゲマンは計畫化の立憲性を論證する事に頗る努めてをり、前揭の彼の著書は其の第一卷を主として此の目的に捧げるものである。

英國では一九三七年工業人口の地理的分布に關する勅命委員會を設け此の問題を頗る愼重に審議研究し、一九四〇年一月末日に報告書を公表し、云はゞ英國々土計畫の基礎資料及び原則とも稱す可きものを發表したが、其の委

員會は多數意見と少數意見とに分裂してゐる。其の理由は一方に對策措置に就いて保守愼重の傾向があると同時に他方には急進積極の主張があるからである。例へば多數意見の控目なるに對して少數意見は、解決對策、殊に其の手法に就いて强力な中央機關、殊に一省を設け諸問機關的權限の外に、總ての新設工場並に全國の總ての工場擴張に就き監督を行ふ權限を與へる。更に全國を禁止地域、許可地域、自由地域の三地區に分ける等、可なり强力な權限を要求してゐる（前揭「三田評論」十一月號、「都市問題」八・九・一〇月號參照）故に英國に於いても一般的に舊態依然たる自由主義者に混つて積極的な强力的計畫論者が存在してゐる事を明かに物語つてゐる。

（三）

此の種の政治的論議に就いて詳細に述べるのは少々、場所柄、不適當と思はれるので、玆に大體の傾向を指摘してみよう。先づ第一に自由とか民主々義とか或ひは獨裁と云ふが今日、計畫化運動を中心として直面してゐる問題は然かく簡單に答へらる可き問題では無い。私の考としては此の問題は高度技術――從つて技術家――の問題と指導者原理（フューラアツーム）の問題と獨裁（ディクタツール）の問題とに分けて三面的に觀察する事が出來ると思ふ。つまり計畫化（プランニング）の問題が政治的性格としては此の三者の關係となつて現はれて來る。

私は嘗て或る雜誌に次の樣に述べた事がある。

『近來の政治動向に於いて、其の價値を最も根本的に疑はれたものは民主々義であらう。吾々は到る處に統制、獨裁の聲を聽く。成程、民主主義の眞髓乃至は獨裁制の至善、是等は本質的に反撥し合ふものでないかも知れぬ。即ち民主々義が衆愚政治でない限り、又獨裁政治が仁賢の政治である限りは。しかし今日の政治情勢と其の通念に從ふ限り、此の兩者は反撥抗爭してゐるものと見るのが至當である。（中略）何故こんな事を問題にして來たかと云へば、吾々が取扱ふ當面の事情が、之れに頗る關係が深いからである。當面の問題とは何かと云へば都市計畫或ひは計畫經濟或ひは社會計畫等々である。

『是等の問題は元來誰が取扱ふか、是等の計畫の立案者となり計畫者となり又執行者となる者は所謂民衆ではない、素人ではない。即ち專門家であり、所謂技師であり、是等の問題に素人が、民衆が一知半解の知識を以つて容喙するは最も危險であり、最も非効果的である。此處に於いては專門家が、所謂エキスパートが支配しなければならない！

『そこで專門家と素人、此の對立が發生して來る。前者は後者を輕蔑する、後者は前者を排斥する。一方ではその無知を憐み、他方ではその尊大を憎む。此の反撥は專門家と大衆との知識的間隔の懸絶が縮少するによつて益々大となる、或ひは社會の一般的敎養乃至は知識の向上と其に增加する傾がある。民をして知らしめざる態の往昔は、知者の言、其のまゝに行はれたであらう。又彼等はそれを行はしむる權力を持つてゐた。現代に於いては大衆は懷疑的である。一應は疑惑の眼を以つて眺める。』（雜誌「道路の改良」昭和十一年六月號論說「道路―技術と政治」）

私は玆で冒頭に述べた樣に今日の場合に於いて各種の技術の社會的意義の增大飛躍と云ふ事を考へ、技術及び技術家が指導的地位に置かる可き事を豫想する。次になほ進んで次の樣に述べた。

『吾々は專門家と民衆の相互信頼による融合と其の効果とを見る事が出來る。民主的なるものゝ眞髓は、從つて他をして爲さしむるの明にあり、他の行ふ所を寛容するに在る。專門家たる者の本領は、自己の專門に於ける萬全の知識と其の職分遂行に就いての責任感とに在る。政治の要諦も實にこゝに存するものと思はれる。政治家が民衆を指導するとは、此の關係に於いて民衆の開明を期待する事に外ならない。』

『反之、兩者の關係が乖離せる時、一方に於いては所謂、衆愚政治が行はれ、他方に於いては獨裁政治が行はれる。吾々は獨裁主義の德を說かれる事、屢々である。勿論仁者賢人の施政は正しく且つ最も善きものであらう。此の意味に於いては獨裁も亦可なり、否、かくあるならば勿論獨裁でなければなるまい。從つて獨裁とは當然、最適者の獨裁を意味する。最適者とは即ち專門家である。エキスパートである。故に獨裁とは專門家のそれであつて、又それ以外であつてはならぬ。』（中略）

『故に獨裁が「獨裁」として響くには二つの事情によるものと云つていゝ。即ち第一には民衆が無知であつて專門家政治の眞義に通ぜぬ場合、第二には所謂獨裁者が眞個の「專門家」たらざる場合である。其のいづれの場合を問はず、共に「獨裁」なる事實が强調され、支配せらるゝもの、管理せらるゝものに「獨裁」の所感を强くする。施政者は「獨裁」力の强化を欲する。此の意味に於ける「獨裁」はいづれも採る可からざるものなるは云ふまでもない。即ち「獨裁」は不可である。』（同上論文、尙ほ私の「現代大都市論」に一部を收錄）

つまり獨裁の不可なる所以はその發生する事情が、一方には似而非專門家の支配を意味し、他方には民衆の蒙昧を意味するからである。

獨逸で云ふ指導者原理（フューラアツーム）は此の意味で云ふ專門家の管理に外ならない。Handwörterbuch der Betriebswirtschaft の Führerprinzip の項で Hans Hohlfeld も之れと同じ樣な意味で說明をしてゐる。即ちヒットラアのマイン・カムプを引用して多數決原則の無性格なるを指摘し、凡べての決定は人格原則に據らねばならぬ旨を力說する。『最早多數決なぞではいけない。唯、責任ある個人でなければならない。』從つて凡べてに就いて忠言者があつて之れが指導を行ふ。其の體制は「下に向つて權威、上に向つての責任」の體制でなければならぬ。故に指導者原則の他の半面は服從原則（Gefolgschaft）である。此の一見して最も不愉快の響を持つ名辭も指導者原則の本質を理解すれば其の不快を滅消せしめるであらう。何故かと云へば指導者原理による政治は、「國民の內に其の目的物を見出すのでなくして、國民の內に生活し、國民と共に感じ、國民の爲めに戰ふ」ものであるから、隷屬・盲從を要求する權力支配と決して同一では無い。指導者の人格にあらゆる權力が統一せられても、其れは無制限の恣意を意味するのでなくて、全體に對する奉仕を意味するのである。斯くして指導者原理は民衆の先頭に立つて實踐躬行的に之れを指導して行く即ち國民と共に進む）姿となつて現はれて來る。

之れに反して、此の體制に限りなき憎惡の念を懷くものはソ聯・伊太利・獨逸に示された獨裁體制の特色として、Ogpu, Ovra, Gestapo の制度を擧げて「秘密警察なくしては政治する事が出來ないと云ふのが是等獨裁制の特色である」と極論する（Wickham Steed: Dictatorships: What Next?）又或る者は同じ樣な意味で一國一黨の制度を獨

裁への不可分のものと指摘する。即ち前記の所謂現代的獨裁制には性質上の相違があるにも拘らず自由の否定と破壞とに於いていづれも共通點を持つてゐる。「彼等は同じ型の政府を用ひる事、つまり獨裁制によつて此の事を成就する。そしてこの獨裁たるや說得と强制との二重の支配方法による獨裁制の行使であり、此の支配に對していづれも同一の組織即ち一國一黨の組織を持つてゐる。是等の現代獨裁制の性質及び其の成功を充分理解するに手懸りとなるものは此の一國一黨の觀念である。』（Arthur Feiler: The Totalitarian State. Planned Society. chap. XXIII）ファイラア教授は之れに關連して興味ある問題を衝く。彼等は自由否定を人間等質論から抽き出す。彼等が認め、評、價し、且つあらゆる種類の教育的力で養成せんとする所のものは個人（個性）ではない。單一の個性、自己の信條、自己の理性に根ざし、從つて自己の個性價値に立つ（つまり自由の權利義務）獨立自責の個性では無い。其れは集合化（コレクティブ）された人間で集團、階級、又は國民の一部であらねばならぬ。又さう自らを感得しなければならぬ人間である。從つて經濟原理ではあらゆる强調が生產面におかれる。是等の國々では、工業化、現代技術、歐羅巴が好んでアメリカニズムと稱するところのものが盛んに說かれるのである』（前揭書）つまり此の見解に結んで國士計畫なり五ケ年計畫なりの傾向を促へる事が出來る。國土計畫が或る意味に於いて國防的體制の一表現だと云ふのも此の意味に於いてゞある。

獨裁に關する二樣の解釋を揭げたが、獨裁に關する概念が明確でなければならぬ所以が之れ丈けの引用に於いても明かにされてゐる。協同主義的民主々義者の意見を引用するとなほ、問題の錯綜せるに氣がつくであらう。

『動物の肉體は細胞の社會である。各細胞は一つの特別の器官に屬してゐる。各器官は細胞の委員會で全體の利益、惹いては自分の利益の爲めに奉仕してゐる。之れが奉仕（サアヴィス）の民主々義である。事實此の生物學的方法は理想的で且つ實際的である。民主々義の目的は　丁度人體の場合の樣に特殊の集團に分けて、全社會の爲めに特殊の職能を行はしめるに在る。之れは協同組合で行はれてゐる委員會方法である。各人は各々の特定の領域で奉仕し、エキスパートとならねばならぬ。非常に高い才能を持ち有能な人間が斯くして見出される事になる。そして斯くして專門と能率との眞正なアリストクラシーが常に發展する可能性がある。かゝる眞正のデモクラシーにあつては、一個の普遍的なアリストクラシーが成立すべきものである。デモクラシーは協同的アリストクラシー、優秀者の民主主義に向つて成長せねばならぬ。』（J. P. Warbasse: Cooperative Democracy）

デモクラシーは相對的であつて、或る人を選んで仕事を委任した瞬間に、彼は上位者となる。結局民主々義の今迄の方法（選擧）は最良の決定でも最賢の決定でもなく、單に多數者の決定に過ぎない。故にデモクラシーは屢々愚者による破滅を斥けゝと共に賢者による救濟をも併せて否定しまつて、結局平均者による救濟を求むるに過ぎないのである。故に高度の協同社會がエキスパートによるに賢にして能率的な支配或は管理を行はしむる可能性があると云ふ事は一つの理想として樂しみ得る境地であらう。

（四）

計畫論者が此の意味で仁賢の政治を說くのは前揭のヘーゲマンに見た樣に　之れによつて獨裁的色彩の粉飾を免

れんとするに外ならない。彼の理想的政治家はプラトオである。遠大なる哲學的識見と冷徹なる理論と熱烈なる正義心を持つ事が計畫家的政治家としての資格とされてゐる。計畫化が純正科學に基礎を持たねばならぬ事は、吾々の夙に主張する所であるが、其れが故に計畫化の政治的性格が全く離脱すると云ふものではない。計畫化が非常に強い政治的性格を持つ事を看逃してはならぬ。『賢明なる社會的行爲に對して、何を爲す可きかの決定が爲される以前に於いて、知り得可き事の全部を知つておく事は確かに必要である。併し之れによつて、事實に關する單なる知識丈けで、是等の諸事實が如何に、如何なる方向に變更され又は事實變更せらる可きや否やに關しての提言を傳へる事を意味するものでは無い。』計畫は其の目標、その執行、其の結果の三面に於いていづれも政治的な意味を持つて來る。社會科學者及び實際的計畫家の見地からすれば最善の計畫とは與へられた目標に對して技術的にも、又特殊の學科が關はる所の資料の點でも完全である所のものである。其の目標は、自然資源の保存にせよ、社會的不安定の根絶にせよ、經濟力の再配分又は勞働の生產力增大にせよ、常に目標は政治的である。『目標の決定は相剋する關心間の妥協を見出すか或ひは他の利益の爲めに或る特定の利益を無視するか、いづれかの路を必要とする。かゝる相剋する利害集團は、計畫の執行によつて生ずるであらう政治權力、經濟力或ひは社會的評價の再配分に對する異なれる態度から主として生ずるものであらう。』（Hans Speier: Freedom and Social Planning. American Journal of Sociology. 1937 January）或る研究者は計畫化に對する不滿及び抗爭の淵源を次の六點に求めてゐる。即ち（一）個人又は集團の抗爭的經濟利害（二）哲學的文化的態度の相違（三）計畫の政策に反する傳統的信條及び先入感（四）一定の政策の結果評量に就いての相違、（五）事實に關する不充分なる知識と解釋の相違、（六）氣質及び環境的勢力による抗爭及び協力に對する態度の相違等が之れである。（Lorwin and Hinrichs, in Proceedings of the American Sociological Society. Vol. xxlx, 1934. 前掲論文脚註引用）

此の計畫化が政治的であるとの解釋は頗る至當である。如何に計畫が純正科學に支援され樣とも、或ひは又、科學の支援が大なれば大なる程、政治的性格が濃厚になつて來る。常に吾々が指摘してゐる樣に、吾々が計畫化の對象とする所の資本も土地も勞働も決して單なる事實又は物資乃至は單なる人間ではない。是等のものは常に社會・經濟的約束の裡に存在するものであるが故に、之れを或る方向に向つて取上げる事は、此の社會・經濟的約束に對して何等かの態度をとる事を意味するのである。大都市集中とか工場の過度的集積とかは單なる人口的又は產業的事實では無い。從つて人口の再分布や工場の分散を計畫する事は、今日の社會・經濟關係に對して一定の態度を取る事を必然的に余儀なくさ・るのである。

最も明瞭な領域の計畫として例へば經濟計畫を擧げる事が出來る。併し此の場合と雖も既に前の機會に紹介した樣に、問題は純經濟的にのみ解決する事は出來ないのである。（本誌昭和十五年八月號「計畫化と社會科學」第一節參照）經濟計畫、殊に國土計畫的な體系裡に於ける計畫は經濟活動のあらゆる因子を基礎單位に還元して計畫する事が最も肝要である。此の事は既に私の小著「國土計畫論」の中で指摘してゐる點であるが、其の際私は均衡理論に論及しつゝ次の如く述べた。

『一物體に影響する諸力はいづれも力として同じ範疇に屬さねばならぬ。秤を以つて云へば、平衡を保つ爲めの錘は常に重量に於いてのみ考へられる。從つて均衡觀念はウエイト（重量）觀念でなければならぬ。異質的のもの（然かも重量を標準にしない場合）に於いては均衡觀念を得る事が出來ない。（中略）それ故に均衡論としては力又は重量又は數量といふ因子に還元せしめられた上でなければ問題にする事が出來ない。現に工業の過度的集中と云ふ。それは工業經營單位の一地域に於ける數量的過重を意味する。國土計畫に於いて唱へられる分散主義の傾向が常に富・人口等に就いて云〻してゐるのは此の理に基くのである。即ち人口も富も共に均衡論中に於いて取扱ひ得べき因子であるから。』（前掲書七五頁）

故に國土計畫、殊に經濟計畫に於いて凡てのものがエネルギーに還元せられたり、或ひは勞働量に還元せられて計量せられるに非ざれば充分なる計畫化は不可能であらう。型態的計畫化――主として土木的と稱せらるゝ計畫は線や點によつて幾何圖形的な方式に表現するであらうが、機能的な計畫は數字的なバランスとなつて示されて來る。

併し經濟計畫の本質がさうであるからと云つて　既にも述べた樣に經濟計畫の成功が數字上の整頓配合の巧緻丈けで求められるものでない。何となれば計畫は其の執行に際して常に純粹經濟面丈けに限られないで非經濟面への交渉や關與が頗る多いからである。『如何なるプランの執行も唯單に與へられた物的條件即ち自然資源、技術の狀態とか云ふ事に丈け依存するものではなくて、その計畫に從つて是等の條件の變更を考へてゐる人々にも依存するのである。經濟計畫は執行が容觀的經濟的可能性のものと稱せられるものに關はる。嚴密に經濟上の名辭に分析されねばならぬ。情況中の非經濟的要素は純粹の經濟分析の外に存するものである。』

かゝる要素としては計畫に關はる人間の文化的特徴、即ち宗教的道德的信條、一般的傳統及び經驗、傾向及び主義、趣味　偏見及び癖性、適合性及び組織性、權威及び合理性に對する態度、其の他、經濟的要素ほど知覺し易くは無いが、決して重要でないとは云へない他の多くの要素がある。是等の要素が經濟計畫の仕事をして經濟領域を遙かに越境せしめる事となる。『關係の經濟上の資料に關しては間違の無く、完全な計畫でも若し人間活動の複雜性に對して考慮する所なくして設計されてゐると、無視せられた非經濟的要素が、計畫が實行に移された曉に於いて豫測せざりし經濟上の結果、希望しなかつた結末となつて前面に現はれて來るであらう。』茲に計畫化問題が頗る多方面に衝擊を與へ勝ちになる素地が開かれてゐる。經濟上の計畫に於いて間違は無くとも、非經濟的要素の蠢動が社會計畫の統制的性格に一定の色彩の濃淡を附加する事となる。つまり自由と統制との均衡に決定的な影響を考へ計畫の對象となる人間から全意的協力の得られない限り、之れが强制を必須化する事となる。

此の事實は恐らく統制の複雜且つ徹底的になつて來た今日に於いてあらゆる方面で見る事が出來るであらう。賃銀の高低を目標にして勞務者が移動してゐた從來の仕來りが、公定賃銀制によつて其の重要な機緣を失ふと、今度は極めて些細な事情をも之れを機緣として移動浮流する結果となる。商品の購入に就いても同樣である。同質の規格品が公定價格で、然かも或ひは現金で買はねばならぬと云ふ事になれば購買者は頗る自由な立場に置かれる事になり、彼は當の商店のサアヴイス其の他些細な差異によつて動く事になるであらう。統制が强化すると紛爭の中心

點が屢々末節枝葉の點に迄下降する所以も同様である。故に前に掲げた計畫に對する抗爭の六點としても決して是等が平等に作用するものでなく、情況に應じて或るものが強く又は弱く作用するであらう。

（五）

玆で民主々義の要求、從つて獨裁制への非難を一應聽く可きであらう。若し計畫下の民衆に何等かの重壓又は抑壓を感ぜしむるのが獨裁制の一特徴であるとすれば、前項に述べた樣に非經濟的要素、即ち文化面に於ける之れが關係は頗る微妙だと云はざるを得ない。或る論者は計畫化の過程が一氣呵成であるか緩徐的であるかに就いて獨裁と民主制との相違を求めようとする。即ち『平和時で、國家的緊急時でない時には過去一世紀に亙つて成長して來た弊害を是正せんとする計畫が一夜にして成就せしむる事が出來ないとしても其れは民主々義の致命的弱點ではない。確かに民主々義的過程は時間を要する。併し之れは大多數の國民が彼等の自由に對して好んで支拂ふ代價である。』反之、獨裁者は計畫が出來次第、一氣に之れを即行せんとするのである。（Bushrod W. Allin: Is Planning compatible with Democracy? American Journal of Sociology. 1937 January）民主々義が緩徐的方式であり、且つ教育的手法であると云ふ事は既に古から云はれてゐる事であるが、之れと性急なる獨裁者とをプランニングに就いて對立せしめゝ事は一つの解釋と云はねばならぬ。何故かと云へば、計畫化の性急なる執行は、前項に述べた摩擦を惹起す危險の最も大なるものであつた。其の結果、意志の善惡に拘らず計畫下の人々に對して刺戟を強からしめるからである。

併し問題は玆で果しなき論爭を繰返すであらう。何かと云へば、民主々義的計畫論者は一部人士の頭腦による最良計畫と云ふものを容易に認めないし、從つて最善の計畫と雖も實際に處しては種々なる修正や變更を受け乍ら、關係の（計畫下の）人々の援助を俟たねば完全な遂行を見ないと主張するに對し、計畫萬能論者は、最良計畫の遂行の障害になる利害、無知、煽動、感情、貪慾等を指摘して計畫執行の果敢を主張するからである。此の意味で民主的計畫論者ェ專門家をそれ程高く評價しないで凡俗人の建設的努力を高く買ふ者である。例へば米國農業更生對策に就いて專門家は一定の意見を持つが、實際の農民がどれ程此の判斷に同意するかは別問題である。「デモクラシー及び官僚主義の問題が生ずるのは此の點に就いてゞある。」併し計畫の當事者たる農務官廳の指導者が「長期計畫はエキスパートのみによつて進展せしめられるもので無くて、農民自身の出來る丈け大なる參加に俟つものである」と云ふ態度を示す事によつて民主的な回答が與へられてゐる。此の見解は、計畫化の必要を痛感する民主々義國の人々にあつて頗る強いものがある。勿論、玆で云ふ計畫化とは中央の、大規模で全面的な、且つ相當強力な計畫を指すものであるから、彼等は常に中央强權化に畏怖の念を懷く、從つて絶えず、個人、局部、地方の自由的參加の條件を强調する。地方主義又は地方計畫の唱導は確かに此の邊の消息を傳へてゐる（地方主義（リヂオナリズム）の問題は別に取扱つて見たいと思つてゐる。玆では D. Davidson: Attack on the Leviathan—Regionalism and Nationalism in the United States. 1938 を擧げておくに止める）故に彼等は云ふ。『民主々義下に於けるプランニングとはいつでも說一書を添附した靑寫眞の作製と云ふ事ではない。計畫化とは凡俗人の參加が專門家の參加と同樣に重要だと云

ふ一つの社會的過程（Social Process）に外ならぬ。此の過程に於ける凡俗人の役目は單に智を吸收し、從つて專門家に教へられると云ふ吸取紙の役目ではない。それは兩樣の過程で、各々が他方から教へられるもので、そして一緒になつて、どちらが一人でゞもやれない樣な最も良い案を作る事である。』（前掲論文）

此の論者（Bushrod W. Allin）は可なり高度の民主制を懷想してゐるものと云ふ事が出來る。彼は一方に於いて（主として米國の農業經濟計畫化に就いて論じてゐるのであるが）土地利用に關しては私的創意が決して公益原則に合しない事を卒直に認めてゐる。『從來の經驗は私的創意や利己心が公共的必要を適切に保護するものとして信賴するに足ると云ふ古典派學說を非とする。併し公私利害を協和させる最も有望なる措置は民主的に決定された集團的說得と勸誘の方法である。是等は正さにプランニングによつてのみ發展せしめられるものである。』或ひは『是等の觀念が吾がデモクラシーにとつてその消化作用よりも遙かに急速な程度で押し込められてゐるかも知れない。民主々義の擁護者の中には今日行はれてゐる計畫化に對して反對の聲を高唱してゐる者もあるが、それ等は失意の政治家、正統派經濟學者、そして實業家であつて、彼等の利害が農民、勞働者、革新的經濟學者によつて作られた計畫によつて不利な影響を蒙ると考へてゐる人々の樣に思はれる。』此の革新性を認めた論者が他方に投票による團體的交渉に絶大な希望をつなぐのは若干奇異の感を懷かせる。何となれば其の國家が餘程强靱でなかつた限り、私益的民主々義の國々に於いては國策の浮動を來して國家的危機を招く恐が多分にあるからである。併し論者が教育の効果としての理念的同化を强調する所は充分に認めて然かる可き點であらう。

『個人又は其の集團は、現在の經濟組織が政府の力を借りてどの點でどれ丈け圓滑に作用する樣にせしめられるかと云ふ事に關して或る考想を持つ。其して宣傳又は其の他の大衆の思考に作用するあらゆる手段を用ひて此の考想が一般に承認される樣に努力する。細目の計畫は必然、此の考想の一般的承認に從つて起る事となる。』

吾々が計畫の高度科學性を主張する事も此の理に外ならない。冒頭に述べた樣に統制や計畫が正しい指導であつて、獨裁でない爲めには科學性を充分に保持しなければならぬ。科學的に訴へる事は大衆の理解を導く最も有効的な方法であらう。此の意味で計畫化が技術的觀點に立脚し且つ生活指導に對する理知への信賴であると云ふ考方は正當である。（Hans Speier 前掲論文）Hans Speier は計畫殊に經濟計畫の非經濟面への接觸を重要視してゐるが、彼が「計畫化」の容認せらる可き條件として事態が常に變動又は可變的である事を指摘したのは面白い。『社會計畫は將來の行動の事前的決定又は豫告的條件づけであつて常に其の創始期に於いては變化を伴ふ。（中略）明らかに新計畫は人々が社會的變化に慣れてゐればゐる程、一層容易に受け入れられるであらう。或ひは、更に適切に云ふならば、計畫化が、いつでも常に急速な變化を行つてゐる樣な生活領域（例へば米國文明、殊にテクノロジー）の方面にのみ限られたならば一層容易に承認されるであらう。』茲で彼がシヴィリゼイシヨンと云つたのは、文明を物資的機械的制度規約的合理的な形式を見て、其の反對面たるカルチュアに對立させ、後者は傳統、信仰、慣習、迷信、情緒的な世界として、茲に述べた樣に最も複雜で合理的解釋の容易でない、つまり計畫化に對して最も抵抗の强い所と觀察してゐるからである。『若し計畫に盛られた變化が過激なもの、つまり基本的な習俗の壞滅を意味するな

らば、必ずや反對に際會するであらう。』習俗の世界は最も根強いが故に之れに觸れる事は頗る愼重を要するのである。別の言葉で云へば論理的な計畫の成功は非論理的な基礎に基く同意に依存し勝ちなのである。云ふ迄もなく前から述べて來た事は、計畫論に於ける教育による効果を問題にしてゐる。既に述べた樣に若し計畫化に對する抵抗が獨裁制の故に鎭壓されたとすると、それは計畫執行中に現はれて來る。從つて當局は計畫の放棄或ひは修正の必須に直面するか或ひは或る種の組織、機關が之れと反對の信條を奬勵したり、計畫の急速な執行に邪魔になる樣な習俗の持續を計つてゐる樣な場合には、原計畫の中には入つてゐなくとも其の實現に關係ある樣な組織・機關の變更の必要に迫られる。教會の改組が行はれる樣な場合は、其の事例の一つであるが、斯くの如く正規な組織を持たぬ場合には問題は相當困難である。例へば家庭の如きそれであつて、家庭は基本的習俗の再生組織として最も有力なものであるが、集中的組織になつてゐない丈け取締に非常な困難を感ぜしめる。此の事は今日、統制及び計畫化の進行しつゝある國々に於いて常に對策に腐心しつゝある問題である。故に於いて急進的な計畫下にあつては當局は教育統制によつて計畫執行に有害な舊信條の再生を阻止し、新信條を奬勵して同意と協同とを支持しようとする。此の事は既に一つのパラドックスである。何故かと云へば教育による統合の手法は比較的長期且つ考方によつては迂遠とも云ふ可きものであつて、早急の計畫執行を苦慮する當局が、此の迂遠な方法に出づる事は頗る矛盾である。茲に計畫化なるものゝ具體的困難性が最も能く顯示されてゐると云へる。

Speier が此の點で次の矛盾を指摘した事は注目に値する。蓋し彼の所言は非常に多くの示唆に富んでゐるから。

『故で注意せねばならぬ事は、傳統による統制に替りて教育による嚴重なる統制が行はれると云ふ事である。其の明白な目標は、未だ存在してゐない或る傳統の操作と云ふ事にある、革新的計畫者は、理性と論理の所產である彼等の知的勞作の成功が、否應のない同意を非論理的な基礎に求め得た時に確保されると云ふ矛盾的情況に對處せねばならぬ事となる。論理的合致よりも非論理的遵則の方が優越すると云ふ事はどの社會集團內にあつても、あらゆる種類の和合、同意及び協力に就いて具現され得る所である。（中略）此の場合、論理的推理はかゝる代替物として極度に不適當なのである。』（A. J. S. vol. XLII. Nr. 4. p. 476）

此の事は氣銳の科學的計畫家の潔しとしない點であるかも知れない。併し此の種の忠告は、社會大衆の（そして之れは必ずしも下層大衆の問題ばかりでない）生活性格と云ふものに對する深い洞察と云ふ事が出來る。同時に又、廣汎なる（國土）計畫が內外共に關はると云ふならば此の忠言は、特に外地經營のプランニングに當つて特に留意す可き所多いと信ずる。

（六）

計畫化の强壓が特に壓力として感ぜられるや否やに關しては尙ほ考慮す可き幾つかの項目がある。例へば計畫の性質が直接的であるか或ひは戰略的計畫（Strategic Planning）であるかによつて與へる直接の影響には若干の相違がある。前者は人間の現實の行爲の直接的變化を目標にするものであるが後者は局相的に行はれる人間の生活の條件の變化に重點を置くものである。農業機械化計畫が前者とすれば中央的信用政策による變動防止は後者である。

前者にあつては計畫の實行は直に凡べての個々の農民の協力に據る事となり其の再教育再訓練を必要とし更に其の實現の各最小段階に於いて新政策への彼等の同意を豫定しなければならぬ。反之、後者にあつては計畫の成功は中央の經濟地點に於ける一つの戰略的な動きを以つて多少乍ら行ふ事が出來る。從つて各人の行動す可き場合の枠が置かれた事になり、計畫に對する疑義や異論は直接的には其の計畫執行の當時に其れ程强力で無く見へる。即ち結果は比較的長期に現はれると見なければならぬ。併し此の種の信用政策が貯蓄、投資、企業に與へる影響は決して之れが爲めに尠少であると云ふ理ではない。兩者、即ち直接的計畫化と戰略的計畫化との相違は社會機構に對する影響の問題でなくて、新情勢に對する適應の問題がどう云ふ風に個人に委されるかと云ふ點に懸るのである。直接的計畫化にあつては、適應の個人的普及を俟つ事は出來ないのである。玆に兩者の場合に恰も强制と自由との相違がある樣に見へるが、本質的の問題に然かく簡單でない。戰略的計畫化に多大の禍根を藏する事無しとは云へないのである。

計畫化の壓力が知覺されない條件の一つとして當該機構に外部から迫る危險の存在と云ふ狀況がある。此の場合は機構內部に於ける自由への要望が非常に減少せしめられる。計畫化が若しかゝる危險の囘避又は抵抗であるならば此の場合計畫化及び其の執行に對する反對は頗る緩和される。かゝる例として戰爭の場合が最も代表的である。併し國內的には特殊利益の擁護の爲めに、計畫化の要望せらるゝ場合がある。革新的計畫家の要望する所も同樣で、經濟的不安定、生活福祉の欠乏、差別待遇等が社會計畫によつて排除又は緩和せられるが如き場合はこれに當る。同じ理由を以つて土地資源の涸渴は一種の危險狀態の招來と見る事が出來る。從つて土地計畫の如きは最もよく成功せしめる爲めには、此の危險性の具現が急迫せる事情を明かにする事を以つて必要とする。換言すれば將來の危險を如何にして最もよく現在化して表現出來るか、或ひは廣き範圍に亙つて分散してゐる危機を如何にして最もよく集中的に指示出來るか、此の手續は、計畫家にとりて現實的にも假想的にも最も重要な問題である（前揭書、四七四頁）

かゝるものとして無統制な產業及び事業組織が全經濟組織的に危機を招來しつゝある事からして獨占資本的段階に適しい規率性の高揚となり、高度の計畫化が必要とされると云ふ事情は了解出來るであらう。

（七）

扨、私は問題の結論に入らうと思ふ。計畫化の政治的性格に就いては既に述べた樣に頗る議論が多い。多くが之れを强權的のものと見るに反して、有効的な計畫化こそ、正しく民主々義的な制度だと主張する者もある。此の主張は、其の逆を衝いて、之れこそ民主々義國に於いても既に高度の計畫化(統制)が必要となつたと云ふ情勢への解釋に役立つ。事實、樂天的な私的創意の自由行使といふ事は問題外となつてゐる。

結局、問題は本稿でも紹介してゐる樣に計畫化の方法論である。或る論者は早急を排し衆議愼重を勸告してゐる。或る者は徹底的な一擧兩斷を採らうとしてゐる。或る者は中央强權的で、他の者は地方分權的であり、或る者は專門・技術論的であり、他の者は凡俗人の意義を高く評價してゐる。計畫化の事業が因難であるが如く、計畫論上論

陣も頗る複雜である。併し此の事を通じて次の數點の事は確かに主張する事が出來ると思ふ。

先づ第一に今日云ふ計畫化はいづれも個別的乃至は私人的な性質のもので無くして全面的であり且つ統一性を持つたものである。從つて其の性格が當然中央的とならざるを得ない。産業新編制がさうである樣に又、國土計畫（廣義に於ける）に於いて其の頂點を見出したと云つて差支ないかも知れない。從つて第二に何等かの形式で官僚制への必然的傾向が見られるのも當然である。一方分散化の機構的整備（地方編成）が行はれてゐるにも拘らず中央的計畫と統制が玆に厖大な官僚群を築き上げて居る。殊に屢々云はれる樣に經濟の政治化と云ふ傾向から純粹の政治機構の問題許りで無く經濟機構の方面に於いても計畫化の進捗と共に一つのビューロクラシー的型態を造りつゝある。唯、今日に於ける官僚群が所謂ブレイン・トラストと云ふ名辭によつても知られる樣に、充分なる科學的基礎を持たんとしてゐる所に第三の特色とも云ふ可きものが見られる。之れは政治の科學化を意味するものであつて、同時に政治が漸次、管理科學たるの性質を帶びて來たものと考へて差支あるまい。玆で吾々が社會思想史及び運動史上に於ける十九世紀末、二十世紀初葉のフェビアン主義を想起するのも決して不自然ではあるまい。マックス・ベアの說明する樣にフェビアン主義は情熱的理念的改革運動に對する實踐的管理的組織の體系として發展して來た。彼等に對する課題は「何を爲すか」「何を爲すべきか」でなく「どうやるか」と云ふ實際管理の問題であつた。彼等は社會問題に於いて「爲す可き事」が既に確定してゐると同時に、是等の問題を解決す可き手段に就いて理論に就いて、又は技術について「吾々の世紀は既に充分なる用意を持つてゐる」と云ふ考方に立つてゐる。其れ故、彼等が社會遺

動史に殘した功績は良き意味に於いてのみ之れは悪い意味にも轉化するの悲運を擔つたが）ビューロクラティックな機構組織の體系化にあつた。其の代表者シドニー・ウェッブの組織的功績は決して尠少でない。唯、管理に沒頭する事は、之れが一方に偏する時に餘りにも事務的たるの弊害を生む。事實、社會運動が持つてゐた高揚的精神は事務處理の賤務に置き換られ、精神的な救濟は全く求められなくなつたのは如何にもフェビアン主義の運命として止むを得なかつた。今日の計畫化時代も、之れと同じ境遇と見ても著しき錯誤ではあるまい。唯、フェビアン主義を指導した科學は管理學であり會計學であり、經營經濟學であつた。勿論之れが實踐管理の根本的指導理論であるが、計畫化が常に經濟面の操作に終らない事は本論で述べた通りである。其れ故に今日の計畫化の指導理論が管理經營又は經濟學丈けで終るとすれば頗る危險が多いと云はざるを得ない。同時に管理・經營學が今日では其の科學體系に綜合性を要求してゐる事からして假りに之れによつて指導せらるゝとしても純粹な經濟人的指導でない事は全く明瞭である。

其處で第四の特徴として今日に於ける計畫化の指導理論體系として社會學の登場を指示する事が出來る。此の問題は本誌の前の論文で取扱つたが故に玆では詳しくは論じないが、計畫化なるものが本質上頗る多方面、複雜性を持つが故に綜合理論體系としての社會學の活用が頗る有用となつて來る。此の點が前項に述べたフェビアン主義の科學的管理とも異なる所以で、新しく現代的に附加された性格と云つて差支ないかと思ふ。同時に社會學そのものが、此の意味で政治化して來る事でもある。若し經濟學が再び政治經濟學だと云ふならば、玆では政治社會學と云

ふ名辭が用ひられても、必ずしも奇嬌ではあるまい。

併し、問題は簡單に社會學や文化的考慮が指導すると云ふ關係のものではない。私は第五の特徴として第三と第四とを結合させたものが計畫化體系の本質だと云ひたい。つまり第三の點――計畫の科學性、殊に經營・經濟學・技術學からは專門・技術家の登場が期待される。其の指導者が出る。併し第四、即ち社會學的指導理論からは、之れを實踐に移すべき諸條件の制約が、人間生活を現實に規定するところの關係を明かにする事が出來るが、兩者がいづれも單獨であつては本當の意味の計畫者も指導者も現はれて來ない。玆で第三と第四の要素が結合する必要がある。つまり之れが計畫化の本質なのである。

從つて第六の特徴としては、經濟理論が計畫下に於ける人間の生活の物的福祉を確保するであらうが、唯に呑み喰ひが確保されると云ふ事で問題は解決しないのであるから、物的福祉を確保してゆく方法に就いて充分な考慮を要すると云ふ點である。計畫の本體及び其の方法が如何にあらうと、吾々の人間社會の問題である限り其の基底なる人間の生命と其の發展とを無視して了ふ事は許されない。從つて物的生活の安定はあらゆる計畫化の根本條件である。唯、既に述べた樣な事情によつて、簡單に衣食住が確保されゝば差支ないかと云ふと、決してさうでは無いのである。鼓腹擊壤して帝政のあるのを知らなかつたと云ふ話は、衣食住に單に事缺かなかつたと云ふ丈けでは無くして其の求め方に何等不平不滿が無かつたのである。換言すれば指導する者と指導される者とが其の生活指導又は生活上の觀念に於いて全然異つてゐてはならぬのである。若し之れが異つてゐる場合には其れは冒頭にも述べた樣に指導でなくして、獨裁となつて來る。

要するに計畫化は精緻なる科學的體系と構成とを持たねばならぬ所以が玆に明かにされる。計畫化は必然であつても其の方法は分岐するであらう。唯、與へられた課題に對して最も合理的である可き計畫化は、當然、其の方法に於いても合理的でなければならぬ。從つて其れ以外の、獨裁的色彩を纏ふ計畫なるものは似而非計畫と稱す可きであらう。

附記　米國社會學者ロスが古い論文の中で均衡原則に就いて述べてゐるが其處で指導者と被指導者との關係に就いて可なり興味ある意見を述べてゐる。即ち指導者對被指導者の關係は三種あつて指導者が先行する場合、被指導者が先行する場合、指導者の先行を必要としない場合とである。第一に屬するものは自然資源保存、科學調査奬勵行、政政治上の改革、傳染病隔離等一般無識大衆よりも充分な知識と廣い視界とを持つてゐなくては指導出來ない場合であり、第二に屬するものは產業災害の防止、婦人少年勞働の保護、禁止、家產法其の他指導される者が問題の急所を心得ており、然かも其の實現に反對利害關係者が阻止的となる場合である。第三の場合はロスは之れを「道德的問題」に屬するものとし、特別な知識によつて答へられるものでない場合としてゐる。即ち奴隷廢止、賣笑廢止、禁酒運動、家庭保護、宗教的寬大、國際平和等の問題では指導者は相手を說得するといふよりは、主として之れに注意を喚起するに止まるものである。時下、指導原則の意義が增大してゐる時、一應聽く可き意見と思はれる。(E, A, Ross. The Principle of Balance. A. J, S, 1918, May.)